

## 妻にも年玉を

川名将義

夏の季語の一つに「滝」がある。そして、

神にませばまこと麗し那智の滝 高濱虚子

滝落ちて群青世界とどろけり 水原秋櫻子

滝の上に水現はれて落ちにけり 後藤夜半

が「滝」の三大名句と言われている。特に三番目の句は、滝の落ちる瞬間をモンタージュ的に捉えた句として脚光を浴びた。その作者である夜半のご子息が、今回取り上げた後藤比奈夫（滑稽俳句協会顧問）である。

サングラスかけて妻にも行くところ

今の若い人達は誰でもサングラスぐらいかけるが、戦前から育ってきた人達、特に男達には、戦後になっても女性がサングラスをかけて出掛けるなど、考えられないことであった。そんな家長が「妻にだってサングラスぐらいかけて行く所だってあるさ」と容認しているところが、微笑ましくもあり滑稽でもある。

### 民宿の花魁草の厚化粧

山の民宿だろうか？花魁草が厚化粧していると言いながら、実は民宿のおかみさんが厚化粧で…と言っているようで、なんとも滑稽で笑える。

### 太陽に励まされつつ末枯るる

「末枯れ」は、秋も深まって木や草の葉先が枯れはじめることである。そうした草木の葉が防ぎようもなく老境に入り枯れ始めているのに、太陽は励ましているつもりで照り付ける。それによって、かえって枯れが促進してしまう。そのギャップが哀しくも滑稽である。

### 東山回して銚子を回しけり

後藤比奈夫名作中の名作である。季語は「銚子」で、祇園祭（夏の季語）の傍題となる。銚子が巡行しながら向きを変えるとき、銚子と一緒に景色も動く。その瞬間を見事に捉えているだけでなく、まず京都の象徴である東山を回してから、銚子を回したと言うレトリックが素晴らしい。そして、よっこらしよと東山を回したと言うところに、高度な滑稽味を感じるのは筆者だけであろうか。

年玉を妻に包もうかと思ふ

この頃は影の薄くなった「家長」と言う言葉。そのようなことが、まだあたり前だった年代の夫婦であろう。毎年毎年献身的に夫に尽くし、家を守り、家事を切りまわしてくれている妻。子供よりもその妻に、感謝の気持ちのお年玉をあげたいと思っているのである。長年連れ添ってきた妻への、少々テレを含んだ感謝の心情がとても微笑ましく、そんな主の姿が滑稽味を誘う。

俳聖芭蕉は晩年になって「かるみ」を提唱した。このかるみは滑稽とも繋がると思う。但し言葉だけで滑稽さを演出するのではなく、心からの滑稽味が句から滲み出て来る滑稽句でなければ、軽薄な句として読み手に一蹴されてしまうであろう。

・・・ e n d